

李 正熙著

## 朝鮮華僑と近代東アジア

陳 來 幸

この六三〇ページに及ぶ大作は、北東アジア華僑史研究のレベルを引き上げた意欲的な研究書である。朝鮮半島の華僑社會に留まらず、日本華僑、臺灣「華僑」に關する研究史を十分に涉獵したうえ、韓國、臺灣、中國において可能な限り必要な一次史料を集め、それらを駆使している。華僑研究の技術的な難しさは、現地語と中國語の文獻資料の分析力が必要とされることにあることは言を待たないが、植民地時代を経験した地域についてはその宗主國言語による資料をも分析する必要がある。その意味で、日・中・韓の三國語に通じる李氏ならではの、多角的かつ客觀的な學術書が世に出たことをまずは高く評價したい。一九世紀朝鮮王朝の開港期から第二次大戦期、つまり一八八〇年代から一九四〇年代までの朝鮮華僑を分析の對象とし、主として經濟史の切り口からその實相に迫るところに本書の特徴がある。著者が序章で明確に示しているとおり、かつて「侮るべからざる勢力」(一四頁)として支配者日本人によつても脅威の存在として認識された朝鮮華僑の盛衰過程を分析することは、東アジア近代史にこれまでとは全く異なる方角から光をあてるという點で學術的價値がある。

本書は、送出地の中國と移住先の朝鮮、加えてその宗主國日本の三者がプレーヤーとなる東アジアという廣範な領域を扱い、朝鮮華僑の榮枯盛衰という切り口から、日本帝國史、朝鮮近代史、華僑近代史のそれぞれの學問領域に對しインパクトある問題提起を行つている。

本稿は本編一二章と補論二編、序章と終章を加えると合計一六章で構成され、うち六章は今回の出版にあたって書き下ろしたものである。以下のとおり、(1)華僑織物商、(2)華僑製造業者、(3)華僑農民、(4)華僑労働者、の四部構成を採る。

### 序章 中國人の朝鮮移住と經濟活動

#### 第一部 華僑織物商

##### 第1章 華僑織物商の位相と形成

##### 第2章 華僑織物輸入商の通商網

##### 第3章 華僑織物輸入商の朝鮮内流通網

##### 第4章 朝鮮總督府の華僑織物商への對應

##### 第5章 一九三一年排華事件の華僑織物商への影響

##### 第6章 日中戦争期華僑織物商の没落

#### 第二部 華僑製造業者

##### 第7章 華僑靴下製造業

##### 第8章 華僑鑄物業

#### 第三部 華僑農民

##### 第9章 華僑農民による野菜栽培の生成および發展

##### 第10章 華僑農民による野菜栽培の萎縮

##### 第11章 日中戦争期華僑農民による野菜栽培および販賣の變容

#### 第四部 華僑労働者

#### 第12章 廣梁灣鹽田築造工事の華僑労働者問題

#### 補論Ⅰ 一九三一年排華事件の近因と遠因

#### 補論Ⅱ 韓國および北朝鮮華僑の形成および經濟活動

#### 終章 近代史のなかの朝鮮華僑

第1章は、山東幫織物商の形成・發展・衰退について分析する。華僑織物商は朝鮮全體の商店數で二割、賣上總額では二〜三割を占めるほどの勢力があった。そのプレセンスの意味を問うとともに、なかでも要をなす輸入人のルーツが山東省芝罘等の商業資本にあり、商店開設の初期形態が「合股」方式であったことを明らかにしている。日清戦争以前には廣東幫や南（三江）幫の織物商と鼎立していたが、「韓國」併合直前には廣東幫が衰退し、山東幫が織物業界を掌握したとする。

第2章は、綿、絹、麻のいずれにおいても華商が扱う中國産の輸入織物が朝鮮市場で重要な役割を果たしていたことを論じる。綿製品については、上海經由のイギリス産晒金巾は主に華僑が扱い、日本産生金巾は日本人商人が扱うという棲み分けがあり、日本産の移入には在阪華僑が關與していたことが再確認される。一方、傳統的な朝貢貿易品であった中國産絹織物は朝鮮の全消費の四〇%を占めていたが、京都西陣産品の移入によって一九二二年には日本産に凌駕されたこと、さらに、一九二四年奢侈品關稅の導入が中國産の輸入を途絶に追い込んだことを論證する。日本産も朝鮮産も競合し得なかった中國産麻製品については、大量輸入が相當後期まで繼續された。

第3章は、これら華僑織物輸入人の流通網の分析に充てられる。まずは民族系銀行の重役會議録等を利用し、手形による融資を受けた華僑商店の資料から輸入商と卸賣商との取引關係を論證し、さらには地域別差異に配慮しつつ、様々な形で朝鮮社會の末端にまで浸透していた華僑による織物販賣ネットワークの構造を明らかにしている。

第4章は、華僑織物商が獨占的に取り扱った絹と麻輸入に對應して圖られた、朝鮮總督府による輸入制限措置と華僑輸入商に對する税金加重賦課を論じる。從價七・五〜一〇%から一九二〇年の統一關稅導入で三〇〜四〇%に引き上げられた絹製品への關稅率は、一九二四年の奢侈品關稅の施行で一〇〇%となった。中國産がこうして朝鮮市場から驅逐されたのには競合する日本産業界の壓力が存在した。同様に統一關稅導入で二〇%に引き上げられたものの、奢侈品關稅の對象とはならなかった麻織物輸入は一定水準が維持されたが、一九三七年に稅率が八〇%に引き上げられるに至り、市場から驅逐されたのである。

第5章は一九三一年の排華事件と滿洲事變が華僑織物商に與えた影響について分析する。末端の小賣商の閉店は卸賣商の信用危機を引き起こし、最終的には京城と仁川の輸入人の經營を壓迫し、四割は連鎖破綻し、弱體化へと向かわざるを得なくなった。山東幫同士の緊密な相互扶助關係は『鎖』のようであり、弱いところが切れた時にはかえってその關係が弱點となったことを説明している。

第6章は日中戦争と戰時統制の強化が華僑織物商に與えた影響について分析する。日中開戦による通商網の寸断は織物卸賣小賣

商の大量引き揚げと賣掛金の未回収事態を招き、ついで、公定價格制度と配給制度の導入は織物商たちの經營を一層壓迫することとなり、六〇年續いてきた華僑織物商は戰爭中にほぼ没落した。

第7章は、國境の町新義州における華僑靴下製造業について、代表的な民族資本である平壤の朝鮮人靴下製造業との比較において分析を加える。華僑靴下業は中國側對岸の安東の靴下産業資本と華僑織物商の商業資本とによって生成し、低廉なコストを武器に朝鮮人業者にとつて脅威となるほどに成長した。ここで新しい発見は、平壤の朝鮮人民族資本の靴下工場にも華僑の投資があったという事實と、華僑商人がその製品の販賣網の一翼を擔つていたという、商業における朝中協力の實態であらう。

第8章は、華僑が朝鮮の鑄物業に參入した経緯と發展の軌跡を分析する。一九一〇年代に第一號が設立された華僑鑄物工場は、朝鮮釜の需要増に應じ二〇年代急速にその數を増加させ、朝鮮釜生産の約七割を占めた。安東を據點とする宋氏系列工場といま一つの韓氏系列が存在し、經營主も職工も中國の「鑄造之郷」河北省交河縣近邊の出身であつた。技術を伴い、競争力を有した領域でのニッチビジネス成功物語として描かれる。一九三一年の排華事件の影響を受けたものの、靴下製造業とは異なり高いシェアを維持し續けた。しかしながら、戰時統制期に入り、原料の配給量が減少したことにより閉鎖する工場が相次ぎ、衰退に向つた。

第9章は、華僑農民による野菜栽培の始まりとその發展、第10章は一九三〇年代におけるその萎縮の過程を描く。従来朝鮮近代農業史の領域では米作農家を中心に研究が蓄積されてきたが、本書は都市部の華僑や日本人の需要増にあわせて山東出身の華僑農

民によつて始められた都市近郊の野菜栽培に注目する。かくして、一九〇八年頃には五〇〇餘人程度であつた華僑農民數は一九四三年には四、四三八戸二、三、一一九人、華僑戸數の三〇%が農民で占められるに至る(二七八頁)。勤勉にして、肥料利用、集約農法、技術、種子に長じた山東人野菜農は、仁川など都市部で独自の野菜市場を共同經營するほか、自己店舗もしくは行商形式で販賣流通網をも發展させた。しかしながら、一九三一年の排華事件はこれらの野菜經營にダメージを與え、引き上げる者が多く發生し、續く一九三四年九月に導入された入國時の一〇〇圓の提示金制度は、農民の移住に對して制約要素として働いた。そして、同時期朝鮮農民の野菜栽培での成長は華僑の野菜栽培を相對的に弱體化させることとなつた。

第11章は、華僑農民の野菜栽培と販賣が日中戰爭からどのような影響を受け、戰時統制強化によつてどう變容したかを検討する。戰爭による華僑農民の大量引き揚げは野菜價格の高騰を招き、總督府は自力での野菜増産政策を推し進めた。しかしながらその政策は功を奏することなく、總督府は轉じて華僑農民活用の政策をとる、それが一九四〇年代初めの中國人農民の朝鮮移住急増のブル要因となつた。そして、戰時統制下の公定價格制と配給制の實施、華僑行商に對する移動の制限は、華僑農民の野菜生産の萎縮を餘儀なくさせた。

第12章は、一九〇九年〜一九一一年度に廣梁灣鹽田築造工事で雇用されていた華僑労働者問題を事例として取り上げ、華僑労働者問題をめぐる朝鮮總督府の政策や華僑社會の對應、一九三〇年代と日中戰爭期に華僑労働者の人口が減少しなかつた理由について

て検討する。朝鮮總督府は一九一一年に朝鮮人労働界の世論に配慮して「官營事業に清國人使用禁止の件」を公布して華僑労働者の使用制限を實施しようとし、一九三四年には前述の入國提示金制度を實施したが、華僑労働者の入國数は増加の勢いを止めることはなかつた。朝鮮北部地域の開發がそのブル要因として働いたのである。

朝鮮華僑は、朝鮮王朝時代末期の一八八二年に開港された海港地の租界を中心に進出した華商を始まりとする。租界には主に日本人商人と華商が進出して競合した。一九一〇年に朝鮮が日本に併合されたのち、朝鮮總督統治時代には日本本國とは異なる独自の出入國管理政策を運用實施し、朝鮮社會にとって必要とされる農民や労働者の吸収が進んだ。そのため、朝鮮華僑社會の特徴は、國境を接する中國東北部地域からの陸路移民と、船舶渡航が比較的容易な渤海・黃海對岸の山東省と河北省からの海路移民からなる。いずれの經路をたどつたとしても山東省出身者が主體であつたという點からみれば、概説的な一九世紀から二〇世紀初頭までの東南アジアや北米・太平洋の華僑社會の構成とは相當に異なる一面をもつ。日本華僑については、北米へと繋がる太平洋航路の據點に形成された廣東人主體の横濱があり、唐人屋敷の時代から大陸とは最短距離で到達可能であつたがゆえに、長崎では三江と福建に加え、後進組の廣東の勢力が加わり、三者が鼎立した。對アジア中樞貿易港として二〇世紀初頭に擡頭してきた神戸の華僑社會は後者の構成に近い。すこし遅れて朝鮮半島と中國東北部地域を活動範圍とする北幫（山東人と河北人）が進出した大阪は、勃

興する製造業の中心地大阪を據點に勢力を伸張させ、独自の華僑社會を構成したことが知られている。北幫商人の多くが山東もしくは河北・遼寧などに本店をもつ出張商スタイルで大阪に進出し、同郷ネットワークに基づいて東北や朝鮮と取引を行つていた。以上のように多種多様な商人グループを中心に形成された在日華僑とは異なり、朝鮮では現實に農民として定着した華僑が数多く存在した。これまで、日本における朝鮮華僑の理解はおよそ以上のとおりであつた。近年、日本でも北東アジア範圍の華僑研究書<sup>2)</sup>が相次いで上梓されているが、本論は、政治史に主軸を置くこれらに對し、華商が進出し得た領域、華僑農民が定住し得た理由について、朝鮮の社會經濟史の文脈から説得的に解釋を加え、朝鮮華僑に對する我々の理解を格段に豊かにしてくれた。なにより開港から一九四五年までの時期、朝鮮における華僑の数は最大で一九三〇年國勢調査時の九萬人強、同時期日本の華僑四萬人弱（一〇〇一頁）の二倍以上存在し、朝鮮においては一貫して九割以上を占める最大の外國人集團であつた。そうであるにも関わらず、朝鮮華僑の問題は、獨立後の韓國においても正面から問題にされ、研究對象として取り上げられることはほとんどなかつた。手堅い實證研究を積み上げた本書に對して、門外漢の評者が對等に議論を挑む力量も資格もないが、以下に若干補足的意見を提示し、コメントとしたい。

本書が改めて明確したのは、(1) 山東幫の役割、(2) 輸入關稅と朝鮮華商の盛衰との關聯、(3) 一九三二年排華事件の影響の三點であつた。中でも注目すべき功績は、著者が六つの章を割いてはじめて明らかにした、山東幫華僑織物商の朝鮮社會におけ

る役割とその評價であろう。朝鮮王朝末期の中國は朝鮮で自給できなかつた絹・綿・麻織物の供給元であり、その輸入と供給の擔い手として華僑は登場した。ここでは上海・山東（芝罘・烟台の陸繋島）・仁川を繋ぐ商業ネットワークの重要性が指摘されているばかりでなく、開港都市に止まらず、小賣華僑商店と華僑行商によつて、農村の朝鮮人消費者にこれら生活必需品が直接提供され、そこでも山東幫の通商網が生きていたことを論證している。日本による併合後は、上海經由の英國産綿製品は言うに及ばず、一九二〇年の統一關稅と一九二四年の奢侈品關稅の適用によつて中國産絹製品が完全に驅逐され、當初競合相手がなかつた麻製品に至つても、日本製擬麻布や人絹布の移入増や一九三七年の輸入稅率引き上げによつて打撃を被つたことが明らかにされている。

ここで讀み手が領けるのは、朝鮮總督府による諸法制が紡織・西陣など日本の産業資本の要請に合致した効果をもたらしたということであろう。一方、本書の序章では、植民地收奪論、植民地工業化論、植民地近代化論、植民地近代性論が紹介されている（一九頁）が、結論部分では朝鮮近代史に與える示唆として著者が意識したこの問題に對する「むすび」が明確には示されていない。確かに、「植民地期に朝鮮人商人が朝鮮總督府の日本人商人擁護政策によつて零細な小賣商に轉落して衰退したことに焦點が當てられてきた（二〇六頁）」既往の朝鮮近代史研究のスタンスとは異なり、本論では「朝鮮人商人は日本人商人だけでなく華僑商人の壓迫も受け、それが朝鮮人商人を小賣商に轉落させた一因でもあつたこと（五二一・五二三頁）」を提示した。しかしながら、朝鮮における日本の支配が華僑織物商を驅逐すること、

朝鮮に何をもちたのかという根本的な問いに對する答えは茫漠としている。華僑織物商勢力の弱體化によつて朝鮮人が得たものは何か、また失つたものは何か。つまるところ、朝鮮總督府の對華僑政策の受益者は誰であつたのかについて明言は避けられている。かつての競合者である朝鮮人商人が受益者となつたのか。

あるいは、華僑農民の野菜栽培の場合、山東の技術が朝鮮に定着したことによつて朝鮮人農民が受益者となつたというべきか。開戦による華僑農民の引き揚げで野菜が高騰したため總督府は再度華僑農民を引き入れる政策に轉じたという指摘があるが、この場合の總督府の對華僑政策の受益者はどのように考えるべきか。朝鮮近代史の領域に新たに一石を投じたことは間違いないであろう。

つぎに、中國人移民を扱ううえで避けては通れない「郷幫」の問題を考えてみたい。開港初期、山東（北）幫を中心に、南（三江）幫、廣東幫が「鼎立する狀況（四五頁）」であつた。そして、朝鮮華商に關する先行研究は廣東幫を代表する同順泰研究に集中して<sup>3</sup>いた。しかしながら、廣東幫と南幫は日清戦争と日露戦争を経てその勢力が衰退し（四七頁）、山東幫織物商が業界を牛耳るようになったとされる。本論では初期投資の合股形態にまで遡り、山東幫織物商人の、なかでも芝罘との關聯性を具體的に論證している。そして、山東幫織物商に關しては、綿・絹・麻のいずれも上海經由で朝鮮の開港場に輸入されていたことが指摘されている。ではなぜ南幫や廣東幫が衰退したのか。この點について明快な説明は加えられてはいない。一方、本論では「旅滬鮮幫公會」に關し若干の言及はあるものの、上海商界の分析は十分とはいえない。山東幫が具體的にどのように上海―朝鮮間の取引に關

わったのか。上海の山東商人やそのコミュニティの役割はどのようであったのだろうか。上海サイドからの分析を深められれば、廣東幫や地元上海の南幫が朝鮮商圏にはそれほどまでには進出でなかつた、あるいは初期の勢力を維持することができなかった説明に繋がる可能性がある。

さて、二〇世紀に入ってからの山東人による「閩關東（山海關を突き抜けて新しい道を切り開く）」の勢いは周知のことである。地續きの朝鮮半島は、東北、沿海州とならぶ、新天地のうちの一つであった。本書も明らかにしているとおり、朝鮮の開発等種々の原因によって、總督府は日本本土のような労働者に對する入國制限を課すことはなかつた。逆向きに移動した「滿洲」の朝鮮人を考慮しての措置であつたとの説もあるが、これら朝鮮への山東人移民の増加が山東幫織物商人独自のネットワーク形成を増強し下支えたことは指摘し得るであろう。織物や雜貨、野菜を運ぶ山東人行商人ネットワークの實態がどうであつたのか。朝鮮人との相互共存が常態であつたのか、競合が常態であつたのか。主に日本商品を運び、必ずしも輸入華商とはリンクしていなかつた日本の福清幫行商プロフェッショナルとは異なる面貌であつたに違いない。これらが明らかにされていくことが期待される。

第三に、描寫もしくは論究が不足している、あるいは當を得ていないと感じた點を、いくつか指摘しておきたい。(一) 中國本國の政治と僑務政策との關聯の描寫がかならずしも十分とはいえない。總じて朝鮮華僑社會の連續性を捉えるあまりに、朝鮮華僑と清朝政府、北京政府、黨國體制下の國民政府との關係もしくはそれぞれの政府の對華僑政策の違いが浮かび上がつてこなかつた

感が否めない。たとえば、第10章3節では、仁川農業公議會の紛糾事件を詳細に紹介している。中華勞工協會、中華總商會、國民黨仁川支部、領事館が入り亂れての勢力争いの混亂が、結果的には農民を含むコミュニティの分裂を招き、そのことが野菜栽培萎縮の原因の一つであつたと分析されているが、この事件の本質は、力をつけてきた中國國內の労働運動の影響が海外の華僑社會に及んだものとみて差し支えないのではないか。一方、商會と國民黨や國民政府との關係も北伐完遂後の一九二八年前後を境に大きく轉換するのであるが、このことによる影響も考慮する必要がある。(二) 終章部分に「東南アジア華僑は福建幫、廣東幫、三江幫が中心であつたため……(五二七頁)」という記述があるが、三江幫は二〇世紀に入つて、あるいは二〇世紀後半期にはじめてシンガポールと香港など特定の金融中心地である程度の勢力を形成したかもしれないが、一般論としては必ずしも東南アジア華僑の「中心であつた」とはいえない。以上、いずれも本論の主要な論旨ではない末節の記述に關する問題である。これらの表現が本論の價値を減じるものではないことを附け加えておきたい。

さて、一九三一年の排華事件、つまり中國東北地區で起こつた萬寶山事件の誤報と流言蜚語が原因で發生した朝鮮人による華僑襲撃事件については、様々な見解があるなか、本書は補論にて独自の分析を行っている。七月二日に誤報を報じた『朝鮮日報』の檢閲を警務局が通過させたことと初期對應における總督府の怠慢が近因として存在し、不況と貧困下の華僑労働者の急増、朝中商人の商業上の對立および華商の優位が遠因であつたことを明らかにし、一九三一年の排華事件は「日本が滿洲侵略のために意圖的

に引き起こしたのではなく、「複合的な要因によって発生した事件であった（四七七頁）」とする。

韓・朝・中・日諸國は相互に他民族集團をかかえ、これらへの處遇が大きな對立の火種になりえるということを歴史は我々に教えている。しかしながら、本書が隨所で明示したように、對立よりもむしろ協力と共存のほうが普遍的な實態であったことを認識しなければならぬ。本書は北東アジアを構成する諸國民にこのような示唆に富む教示を與えていると思えてならない。

## 註

(1) ここでいう臺灣「華僑」とは臺灣を出自とする華僑ではなく、日本植民地時代の臺灣に對岸の大陸から労働者等として渡ってきた當時中國國籍を有した華僑を指す。

(2) 安井三吉『帝國日本と華僑——日本・臺灣・朝鮮』（青木書店、二〇〇五年）と菊池一隆『戦争と華僑』（汲古書院、二〇一一年）がある。

(3) 姜珍亞『同順泰號——東アジア華僑資本と近代朝鮮』（慶北大學出版會、二〇一一年）、石川亮太『朝鮮開港後における華商の對上海貿易——同順泰資料を通じて』（『東洋史研究』第六三卷第四號、二〇〇五年）などが代表的。

二〇一二年五月 京都 京都大學學術出版會  
A五判 一一一六三二頁 七二〇〇圓十税